

筑後方言のアクセント

—福岡県八女市柳島地方のアクセント生活—

岡 野 信 子

はじめに

筑後地域では特色のある音声生活が営まれている。文全体の高低波のうねりざまにおいても、あるいはいちいちの語音の微細な点においても、その特色が顕著である。この小報告では、筑後地域のほぼ中央に位置する八女市柳島（ヤメシ ヤナジマ）のアクセント生活の実態を、文アクセントと語アクセントとの両面から考察してみたい。

柳島はもと八女郡川崎村柳島（ヤメゲン カワサキムラ ヤナジマ）である。戸数160戸、人口600人あまりの農村で、稲作のほかに八女茶の栽培もさかんである。かつては製紙業（紙すき）も行っていたという。

八女市の方言調査は、昭和33年・39年・44年・48年に、それぞれ2・3日ずつ行なったが、この小報告に取上げている文例は、すべて昭和48年8月16日・17日の柳島調査で得たものである。カード数は763枚、センテンスの数は約1,000ぐらいである。話者の老人の中には、約1キロ東に離れた山内（ヤマウチ）から養子として柳島に入られた方も1人おられる。また店頭や路上での自然傍受では話者の出身地をたしかめがたかったので、副題は「柳島地方の……」としている。

I 文アクセント

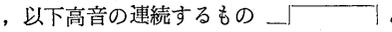
文表現音声の高低のうねりを文アクセントと称する。この小報告の中では、「文の抑揚」という語も同じ意味で用いた。長短さまさまの文には、一文が一波におおわれているものと、高低波の連続しているもののがあって、現実態としては、複数波におおわれた文の方がはるかに多い。いまは、アクセント傾向を見ることの比較的容易な単一波の文をまず取上げたい。つぎに複数波の文についても考察を進め、最後に連文のアクセントについて考えてみたい。文例をできるだけ多くあげて、説明をひかえていく方針である。

1 単一波におおわれた文のアクセント傾向

一文一波の文例をぬき出してみると、高音の連続するものと、後上げの傾向の著しいものが二大勢力をなしている。また優勢ではないが、文頭の高音から、(または第二音節の高音から)急に下がる後下がり文もあり、そのほか、文頭文末に高音がある中凹みのアクセント波  も認められる。

(1) 高音連続の傾向

高音連続文はまた、文頭文末に注目して次の四類に分けることが出来る。

- ① 文頭から文末まで高音の連続するもの 。
 - ドージャリ シラン。どうなのやらわからない。(老男)
 - トーキョーニ トキャ ゴザッタ。あの人は東京旅行の時は来られた。(老女)この抑揚形式は以下の三類ほどに多くはない。
- ② 文頭の第一音節だけが低く、以下高音の連続するもの 。
 - ハシリゴ ハヤカ。あいつは走り競争が早い。(中男)
 - ニホン モロトコー。二本もらっておこう。(中女) <牛乳は一本でいいのかという店主への返事。>
 - オシエウニ ナリマシター。(老男) <もてなしへの謝辞。>以上の二類は、文末まで高音が連続する共通点をもっている。
- ③ 文頭から高音が連続して、文の末尾のわずかの音節だけが低音であるもの 。
 - トーキョーベンドン ツカウナラ ナーニ ナラントジャケン。今日は東京弁など使ってはなんにも役に立たないんだから。(老男)
 - ホンナ コテ ウツクシカッタ モン。あのおばあちゃんは若い時はほんとにきれいだったもの。(老女)
 - アータ イカシャッター。あなた行かれましたか。(老男)

ここにあげた三文例では、たまたま第二音節が長音や撥音の特殊な音節である。しかし文頭からの高音連続はそのためとは限らないようである。第二音節が一般的な音声であっても、「ハナバ モテ キタケン ノ。(花を持って来たからね。)」とか「ソレデッ サイ ノ。(それでね。)」のように、文頭から高音が続くこともある。

- ④ 文頭の一音節と文末のいくらかの音節だけが低く、その他の部分に高音の連続

するもの 。

◦カデ ユー トキモ アル。形容詞の語尾を、スズシカのようにカで言う時もある。(少男)

◦バサラ ヨカ オトコジャッタ。大変美男子だった。(老女)

◦フトカ トコニ イカンナラ デケン。大会社に行かなくちゃだめだ。(老男)
この型は、高音連続の四類の中でもっとも優勢である。

このような高音連続の文アクセントは、淡々とした話調子の時に出がちである。起伏の少ない心情が、起伏のゆるやかな文アクセント波によって表出されるのである。高音連続とは言いながら、その高音はさして高くは響かない。

次に高音連続とともに優勢な、後上げの傾向について見ていきたい。これには単純な後上げと、高音連続の最後をいちだんと高めるものとのがある。前者を後上げA型、後者を後上げB型とする。

(2) 後上げA型

① 文末の一、二音節だけが高いもの 。

◦ヨゴザッショー モ。もっとよろしいでしょう。(中女) <食事のすすめ>

◦ドーゾー。さあどうぞ。(中女)

次のように上昇調になることも多い。

◦チェンジャー。さあチェンジだ。(少男)

◦フカッツロー。わかっただろう。(老男)

② 文末近くに高音の隆起するもの 。

◦アブナカ ヨー。あぶないよ。(少女)

◦ノミナサラン モン。おすすめしてもお飲みにならないもの。(中女)

◦ツメトー ナリマシタデショー。ごちそうが冷えてしまったでしょう。(中女)

◦オチャガワリ。お茶がわりですよ。(老女) <ビールのすすめ>

いまA型とした、単純な後上げ波は、連続波中の一波としてあらわれることが多く、単一波としてはさきの高音連続波ほどに優勢ではない。

(2') 後上げB型

文の後方で単純に高音の隆起するものよりも、高音連続の最後が、さらにいちだんと高くされるものの方が優勢である。この中でも以下のような四類が認められる。

① 文末の一音節が一段と高いもの 。

・ゴメイワクカケマシタ。お呼びたてしてごめいわくをかけました。(中男)

・モドリマッシュューガ。ね、帰るでしょう。(老男)

①' 文の前半に後上げB型のあらわれたもの 。(。)

・サダッシャンプ コラッサン。定さんが来られない。(老男)

・タカナデ ゴザイマス。これは高菜でございます。(中女)

文の前半に後上げ型があらわれると、文全体としてはむしろ後下がりの傾向をみせる。

② 高音連続の最後の一音が上昇調をとるもの 。(。)

・キサラバ。黄ぎらの砂糖を下さい。(中女) <買物>

・ソゲナ コツノ。へえそんなことですか。(老男)

・ドーゾ。どうぞお上り下さい。(中女)

最後が上昇調になることはきわめて多い。話者が女性の場合、最後の高音は特に高く響いて優しいものいいとなる。

③ 文末上昇波が文末長呼音の上にあらわれたもの 。

・バカラシカー。ばからしいわ。(ひきあわないわ。)(青女)

・ヒマンイリマッシュュー。時間がかかりましょう。(老女)

・ドゲナ シリベデー。どんな縁故で来られましたか。(老男)

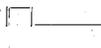
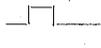
④ 最高音が文末から二番めの音節の上にあるもの 。

・ヒューマゴン デケター。曾孫が出来たよ。(老男)

・トコロドコロニヨッテ チガイマス カラ。その土地土地で違いますから。
(中女)

・オッカシューシテ。おかしくって。(老男)

福岡県内でこのような後上げの話調子を聞けば、すぐに「筑後の人」と思うほどに、後上げ型は筑後の文アクセントに顕著な傾向である。さきの高音連続の文アクセントが、淡々とした心情を表出しているのと対照的に、後上げの文アクセントには、強調の心意が託されることが一般である。後上げと長呼とが伴いがちであるのもそのためであろう。

(3) 後下げ型 。(。)

文の第一音節、または第二音節に、(時に文頭の二音節に)高音が置かれて、それ以下を急に下げるものである。単一波の文ではこれはごくまれにしかあらわれない。

◦フラッシャレン。乗られません。(老女)

複数波からなる文アクセントでは、この型を文頭に持つもの、この型を文の後半に持つもの、またこの型のくりかえされるものと、さまざまにあらわれる。

◦ヒド ゴザイマス ヨー。体が苦しゅうございますよ。(老女)

◦チゲン カー。早く投げないか。(少男)

◦コノ ヒトガ ショーズダツタケン。この人が上手だったから。(老女)

◦オカマイ モ デキマシエンデ。おかまいも出来ません。(老女)

◦フタリナガラ カエツテ キマシタ。子供は二人とも無事帰って来ました。

(老女)

◦ミサンボンズツ クバッテ ノ。お花を二、三本ずつくばってね。(老女)

この型も力をこめて言おうとする時のものいいにあらわれることが多い。また女性のでいねいなものいいにあらわれることも多い。

(4) 文頭と文末に高音のある型 「□□□□□□□□□」。

これまでの記述においては、アクセント波としては、のような型を想定している。ところが、たとえば「ドーモ。」などでは、中凹みののような抑揚波が考えられる。「チンノシャロ カ。」などを二波とみるのに対して、一語文「ドーモ。」を一波と認めるのは、「モ」の前に息の切れめの置かれないうこと、話し手の表現心意にかえりみても、「ドーモ」はこれ以上はわからがたい、ひとつづき文であることのためである。この型も女性のことばにあらわれることが多く、文末の高音の高まりは、長呼を伴って上昇調となることが多い。

◦スイマシエン。すみません。(中女)

◦ゴメンクダサーイ。ご免下さい。(中女) <買物>

◦クルマワ。車はどこですか。(中女)

さきに「オチャガワリ。」とビールをすすめた老女の再度のすすめでは、「オチャガワリ。」であった。強調の気持をこめて発言する時に、後上げ型は文頭にも高まりを持って、このような特異なアクセント波ともなるのであろうか。

以上単一波文アクセントの諸型を見てきた。これらは文アクセントの基本型とし

て、さまざまな組合せで複数波の抑揚体を形成している。

2 複数波文アクセントの考察

現実態としての文の多くは、複数のアクセント波によって、さまざまのうねりを見せている。これを把握するのに、まずその文頭波、文末波の傾向に注目し、その後アクセント波の全体相を見ることとする。

(1) 文頭波の一傾向

文頭に立つアクセント波にもさまざまなものがあるが、一波の終りの一、二音節が急に高くなるアクセント波（さきあげた後上げA型）が文頭に立つことも多い。

- ・キューバ スエン ナイ。お灸をすえませんか。（中男）
- ・アノ ヒトモ ノマスト オモシロカ。あの人も酒を飲まれると愉快になれる。（老男）
- ・ホンムラニドン イチヨロー。本村にでも行ってるんだらう。（老女）

一波の終りは話部末の助詞の上にあることが多いので、（副詞末尾などのこともある。）この助詞の部分が特立して、きこえの特異なものとなる。次のように助詞の部分が長呼されたり、あるいはいくらか上昇調になると、きこえの特異さはいっそう著しい。

- ・カタデデ ケンナー。ボールを片手で打つな。（少男）
- ・オーバーチャンナーー ホトケサンニ スケテ ヤルゴタツ デー。おばあちゃんは仏さんにプラスアルファーほどのいい人だよ。（老男）

また助詞の部分の前にもいくらかの高まりがあって、助詞の部分でいちだんと高くなるものもある。（後上げB型）

- ・アノ ヒトモー ゴーニャ エテジャ ナカ モン。あの人も文章を書くことは格別得意ではないもの。（老男）

このようなアクセント波が文頭から何回かくり返されると、文は一種の調子を帯びてくる。

- ・カラダノ ツヨカガ イジバン バイ。体の健康なのがいちばんいいことだよ。（老女）
- ・コーシューカイ バー レンゴーカイ デー イッカイ ヤリマシタツ ガー ニカイ スルゴツ シテー ソッデ ハナシノ ツキマシタ。従来、講習会を連

合会で一回やりましたのが、二回やるようにして、それで話がつきました。

(老男)

一話部一話部をたしかに相手に伝えたいと思う時、念押し的心情が話部末ごとに高さを置いたものかと理解される。

(2) 文末波の一傾向

① 文末の二音節の上に「高低」の波の見られるもの 「」。

文末にあらわれるアクセント波としては、二音節文末詞が「高低」の波におおわれたものがきわめて優勢である。

・ ホンナ コッチャ ノヤ。ほんとだねえ。(老女)

・ セーサンチョーデスッ タイ。私は我が家の生産長ですよ。(老男)

・ ドノクライ シオバ スット ヨカデス カノ。どれくらい塩をするといいでしょうか。(中女)

この場合も、女性のことばでは、文末の二音節高音が特によく響く。このようなアクセント波が長呼の文末詞の上にあらわれることも多い。

・ ナンバ カキヨッ トー。何書いてるの。(少男)

・ ココワ アツ ゴザイマス モーン。ここは暑うございますからねえ。(中女)

② 文末の二音節の上に「高高」の波の見られるもの 「」。

・ ヒトウリ ホジカ ノヤ。ひとうるい雨がほしいですね。(老女)

・ セワニン チ ナンニン カ オロ モン。世話人はお前さん以外にも何人かいるんだらう。(老男)

この文末波は、さきの「高低」波ほどに優勢ではない。

③ 上昇調の文末波

上昇調の文末波が一文をしめくくることもある。

・ ドゲナ ブーニ シタナ ヨカデス カノ。どんなふうにしたらいいでしょうか。(中女)

文末長呼音がこの上昇波におおわれたものは、いちだんと特色の豊かなものになる。

・ アラ ソー ネー。あらそうなの。(青女)

・ ハッヂューデ ノ---。八十才でねえ。(老女) <感嘆>

・ オモサッシャル ノヤー。むしますねえ。(中男)

- オーゴツデシタ ノヤー。ごちそう作りが大変でしたねえ。(老女) <ねぎらい>
- ヨカデッショー モーン。もっとよろしいでしょう、ね。(中女) <すすめ>
- ツヨカ ナーーイ。元気だねえ。(老男)
- ヨバレタ パーイ。すっかりごちそうになったよ。(老女)
- ホトケサン ダン オゴデ タバニヤン ネーーエ。仏さんをちゃんとおがんでそれからごはんを食べなくちゃねえ。(老女) <仏さんをおがまずに食事をしているおじいさんに聞えよがしに、孫に言っている。>
- イツマッデン ナガシケナッテ ノーーヤ。いつまでも長雨がづいてねえ。
<老女の教示>

(3) 複数波のうねり

一文上に二波以上のアクセント波がある場合、そのうねりぎまは多種多様であるが、これを同似波反復型と異形波連続型とに二大別して捉えることも出来よう。

- コンニャクヤワ モークル フ。こんにゃく屋はもうけるね。(老男)
- トンナオシモ デキン ナ ザンネン ナ コトデ ゴザイマシタ。おとりなおしも出来ず、残念なことでございました。(老女の教示) <死去の悔み>

これらは同似波反復型の一例である。上の二文の高音部の長さは対照的であるが、きこえの単調さは二文に共通している。このような同似波反復文が比較的多いことを、筑後方言「文アクセント」の一傾向として指摘することが出来る。高音連続波がくりかえされる時、文のテンポは幾分早めである。

- アタシャ ソゲントワ エテジャ ナカ モン。私はそんなことは得意じゃないもの。(老男)

この文では前半後半にそれぞれ別個の同似波反復が認められる。

次に異形波連続体の高低のうねりには、当然のことながら、きわめて多数の文アクセント型を分析することが出来る。ここには比較的単純な一、二例をあげるにとどめる。

- ソーダン セラッサンケン フ。相談なさらないからね。(中男)
- ソリヤ ドー ユー ワケ。それはどういうわけ？(老男)

この二文の長波短波の位置は逆になっているが、二文ともに長短のアクセント波がよく張りあって、それぞれに一抑揚体のまとまりを見せている。

◦ コラ オヤズリデス ノ。この気短かさは親ゆずりですね。(老男)
 文頭文末の短波が、中央のやや長いうねりを支えた抑揚体である。

◦ ホンナラー オイトマセジャ コテー。それじゃあおいとましくちゃ。

(中男)

この文では中凹み波に後上りの高音連続波が続いている。

異型波の連なるうねりには、実はその特徴を容易には言いたいものの方が多いが、そのようなものにおいても、一文をおおう抑揚波の全体相は、常にひとつの緊張体、調和体として捉えることが出来る。

2 連文のアクセント

意味の上で必然的な連関を持つ連文においては、その連文アクセントにも、一抑揚体としてのまとまりが見られる。そして前文波と後文波との関連する様は、一文中の前後波の関連の様とよく似ている。

(1) 同似文アクセント波の反復されるもの

この類には「ナーン ナカ。ナーン ナカ。」(なんにもない。なんにもない。)のようにまったく同一の文アクセント波がくりかえされるものもあるが、そのほか、次のようなものをこの類と考えることが出来よう。

◦ イゴク モン。カラダノ。ほんとに体がよく動くよ。働き者だ。(老男)

◦ ヒドカッタゲナ ノ。アノシタ。怪我がひどかったそうだね。あの人は。

(老女)

◦ オチャコーバヤ ナカ。ノーギョーバ ショーッ。いやお茶工場じゃない。農業をしている。(少男)

◦ アンター。ゴーダシエンシエー。カタン イエバ シラン ネー。コーチョーシエンシエー カタン イエオ。ねえ。郷田先生のうちはどこか知りませんか。校長先生のうちを。(中女)

同似文アクセント波が反復される時、きこえは比較的単調である。

(2) 異形文アクセント波の連続するもの

前後の文のアクセント波の型が異なるのにとどまらず、その数にも変化の見られるものが多い。

- シェーフ。シェーフ。セーフだ。セーフだ。(少男)
- ゴザル バノ。オカ[↑]ン[↑]ン[↑]サン[↑]ノ。居られますよ。お観音様が。(老女)
- オカシカ モーン。コッチノ コツワー。おかしいですよ。こちらのことは。(老女)
- ナイ。ソゲン タイ。はい。そうですよ。(老男)
- ドーゾ オアガリクダサイ。ドーゾ。どうぞおさがり下さい。さあどうぞ。(老女)
- アレ シケンドン サルルナラ トテモ。ダーレン イカン。ホンナ コテ。老人大学で試験などされるようならとてもねえ。誰も行かないよ。ほんとに。(老男)

これらのように、型、波数の異なる抑揚体が連なって、ひとまとまりの音声表現体を構成しているものは多い。

最後の文例は三文の連文と見られるが、最終文は全低である。軽く添えた趣の、短い後文が、しばしばこの全低波をとる。

(3) 単一波におおわれた連文

- ヤメン ノ。ヤメン ノ。おやめよ。おやめよ。(老女)

反復連文には、ひといきに発言されて、このように一波におおわれるものもある。以上文アクセントについて一見した。問題が大きすぎて、今は項目を羅列したにとどまるが、今後、考察を深めていきたい。

II 語アクセント

語アクセントの教示者は68才男子、49才男子、中学三年生男女、計4名の土地人である。一枚一語のカードをめくりながらいねいに読むことを依頼して、調査を進めた。調査語は『全国アクセント辞典』(平山輝男編)の「全国アクセント比較表」から借りた508語である。機械的な読み調子にならないように語順を工夫し、また四者が心理的にも出来るだけ同一条件に立ち得るよう配慮したつもりである。四者の語アクセントをここに書きならべることは、予定の枚数では不可能なので、今は概括して述べることとする。

調査時に強く印象づけられたのは、文から独立した一語一語を発言することに、教示者たちは何か不自然さを感じているらしいということである。老人男子は一語一語

に特別に力を入れて、押えつけるような調子でカードを読んだ。逆に中学生男女（以下、少年少女と呼ぶ。）は何やら頼りなげな調子で読み進めた。昭和39年の八女郡、三池郡の語アクセント調査の折にも、老・少の教示者から同様な印象を受けた記憶があるので、教示者の個癖とすることはためられる。今はまだ、その事情を明らかにし得ていない。

1 一音節語のアクセント

調査語 (×印 少年が○▷と発音した語)
 (△印 少年が○▷と発音した語)

柄・蚊・毛・子・血・戸・帆・身・実・世・名・葉・日・藻・矢・絵・尾・木・酢
 ・田・手・菜・荷・根・野・火・穂・目・芽・湯・夜・輪

一音節名詞には助詞ノ・ガ・オ・ニ・モをつけて発音してもらった。その結果は右表のとおりである。助詞を低くつける型が主勢力を占めているが、少年の場合、7語を助詞をやや高くつけた型で答えた。

	○▷	○▷	○▷
老 男	23		
中 男	20	3	
少 男	15	7	1
少 女	22	1	

2 二音節語のアクセント

調査語 (×印は全員が「高低」に発音した語である。)

〔名詞〕 飴・蟻・烏賊・牛・梅・枝・海老・顔・柿・風・金・壁・釜・雉子・傷
 ・霧・桐・釘・口・首・腰・酒・笹・里・皿・杉・鈴・裾・底・滝・竹・塵・爪・
 虎・鳥・庭・布・箱・端・鼻・羽・髭・膝・水・道・石・岩・歌・音・紙・川・北
 ・旅・寺・梨・夏・橋・旗・肘・冬・町・胸・村・雪・足・網・泡・家・池・犬・
 色・腕・馬・裏・鬼・斧・鍵・髪・神・瓶・岸・草・櫛・靴・雲・倉・粟・事・竿
 ・坂・塩・炭・月・土・波・縄・糠・蚤・花・骨・山・綿・跡・粟・息・糸・稻・
 今・臼・海・瓜・輿・帯・笠・糟・数・肩・鎌・絹・錐・屑・空・種・箸・針・松
 ・麦・秋・汗・雨・鮎・桶・蔭・蜘蛛・声・猿・露・鶴・春・鮎・窓・婿・夜

〔動詞〕 売る・追う・置く・聞く・咲く・死ぬ・散る・突く・積む・飛ぶ・泣く・
 鳴る・乗る・引く・巻く・遣る・言う・割る・着る・為る・煮る・寝る・会う・編
 む・打つ・書く・勝つ・噛む・切る・食う・蹴る・漕ぐ・刺す・住む・剃る・立つ
 ・取る・縫う・脱ぐ・練る・飲む・這う・吐く・吹く・降る・乾す・掘る・蒔く・

待つ・漏る・読む・来る[×]・出る・見る^お・居る

〔形容詞〕 無か・良か

二音節語のアクセント

		名 詞				動 詞				形容詞	
アクセントの型		〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇
老	男	143				55					2
中	男	90	41	12		49	4	2			2
少	男	58	84		1	22	22		11	2	
少	女	108	34		1	30	8		17	2	

二音節語は「高低」に発音されることがもっとも多かった。しかし四者ともに「高低」であった語は、名詞30語、動詞13語にとどまる。前表に見られるように、老人男子には「高低」型が安定していたが、他の三者は「低高」型に言うことも多かった。少年少女の動詞アクセントには全高型もかなり多い。中年男子の「低高」型では、後の高まりのきわめて少ないものがあつた。これは「〇〇」型として整理している。いったいに「高低」の発音は比較的聞きとりやすかつたが、「低高」の場合は「低」と「高」との差が少なく、^〇「高高」かと（時には「低低」かと）迷う場合がたびたびであつた。いま調査現場を反省してみるのに、老人男子が一語一語に力をこめて発言したことと、アクセント型が「高低」に安定していたこととは、深い関連があるように思える。強めがない時には高低の差が少なくなるようである。力なげな発音という印象を受けた少年少女の語アクセントに、全高があらわれている。これは高音連続の文アクセントに聞くあの高さで、さして高いという感じを与えない。

3 三音節語のアクセント

調査語 (×印は四者がともに〇〇〇型であつた語)

〔名詞〕 欠伸・筏・錨・田舎・鯛・飾り・霞・形・鯉・着物・鎖・轡・車・煙・仔牛[×]・氷・小山・衣・魚・舅・印・使・机・隣・膠・寝言・初め・鼻血・庇・額・羊・釐[×]・南・都・昔・鎧[×]・間・小豆・麩[×]・毛抜き・桜[×]・翼・釣瓶・蜥蜴・扉・二つ[×]・二人・緑・百足・昨夕・鮑・黄金・小麦・栄螺・力・二十歳・岬・頭・嵐・颯・五つ・恨み・扇・男・思い・面・女・鏡・仇・刀・瓦・拳・曆・境・宝・袴・鉢

畑・林・東・光・響き・袋・仏・筵・紅葉・蕨・朝日・油・命・鱈・胡瓜・心・
 ざくろ・姿・簾・襷・涙・錦・柱・枕・眼・兎・鰻・烏・狐・雀・背中・高さ・狸
 鼠・裸・雲雀・誠・操・蚯蚓・後ろ・蚕・兜・鯨・葉・便り・盥・椿・病

〔動詞〕 上がる・遊ぶ・当る・歌う・飾る・探る・進む・並ぶ・握る・明ける・
 枯れる・消える・捨つる・染める・腫れる・負くる・祈る・動く・移る・恨む・起
 こす・落とす・思う・帰つ・乾く・崩す・砕く・曇る・縛る・叩く・頼む・違う・
 作る・包む・詰まる・照らす・懐く・悩む・習う・憎む・濁る・僻む・光る・許す
 生きる・起きる・落ちる・掛ける・覚める・建てる・付ける・溶ける・撫でる・逃
 げる・晴れる・歩く・隠す・は入る (※共通語の下一段は土地ことばでは下二段
 である。不用意にカードには下一段形を記していた。「捨つる。」「負くる」は教
 示者がそのように読みかえたものである。)

	名 詞					
	○○	○○	○○	○○	○○	○○
老男	82	12	28	3		
中男	44	5	1	67	4	4
少男	29	2	5	85		4
少女	34	5	12	54		20

〔形容詞〕 赤か・浅か・厚か・甘か・荒
 か・薄か・遅か・重か・堅か・軽か・暗か
 遠か・熱か・多か・黒か・白か・高か・近
 か・強か・長か・早か・低か・深か・古か
 弱か

	動 詞					
	○○	○○	○○	○○	○○	○○
老男	42	14	1			1
中男	38			15	5	
少男	6	20	1	15		16
少女	3	21	2	4		28

	形 容 詞					
	○○	○○	○○	○○	○○	○○
老男	15	9			1	
中男				20	3	2
少男	2	9		2	3	9
少女	6	16	1	2		2

三音節語のアクセントのおもな型は「
 低高低」型と「低高高」型とである。老
 人男子の場合は、「低高低」に言うこと
 が圧倒的に多かったが、他の三者では「
 低高高」に発音されることがむしろ多か
 った。「低高低」は「高高低」ともなり、
 「低高高」は「高高高」ともなるよう
 である。「低高低」以外は、「高」と「低」
 との差が聞きとりにくかった。

4 四音節語のアクセント

調査語

〔名詞〕 雨滴・妹・弟・蒲鉾・雷・唇・極楽・盃・正月・相談・楽み・掌・東京
 ・井・雞・日当り・懐・風呂敷・三日月・夕立・綿入・青空・足跡・色紙・先生・
 蛞蝓・朝顔・明後日・鶯・一昨年^{おととし}・螻蛄・果物・七夕・蛤・座布団・挨拶・孝行・
 蝙蝠・商売・親切・線香・魂

〔動詞〕 嘲る・窺う・疑う・悲しむ・従う・養う・与える・重ねる・並べる・始
 める・表わす・驚く・喜ぶ・集める・数える・調べる・助ける・流れる・離れる・
 隠れる

〔形容詞〕 悲しか・尊か・空しか・詳しか・親しか・涼しか・正しか・等しか

	名 詞						
	○○○○	○○○○	○○○○	○○○○	○○○○	○○○○	○○○○
老男	2	10	11	2	2	7	8
中男	11	18			2	10	1
少男		7	3		10	13	9
少女	1	2			18	8	13

	動 詞			
	○○○○	○○○○	○○○○	○○○○
老男	20			
中男	20			
少男	5	11		4
少女	2	3	8	7

	形 容 詞				
	○○○○	○○○○	○○○○	○○○○	○○○○
老男	7				
中男		7			
少男	1		3	3	1
少女	2		3		3

四音節語になると、老人男子も名詞はさまざまなアクセント型で発音した。ただし、動詞、形容詞のアクセントは「低高高低」型に安定している。一方、少年少女ではほとんどの語を、語頭から二音、三音、あるいは全四音を続けて高く言うことが耳立たしかった。

以上、一音節語から四音節語まで、語アクセントを瞥見した。一・二音節語では語頭を高く言い、三・四音節語では語頭語末を低くして、途中をやや高く言うのがこの地方の語アクセン

トの一基本型であるが、それとともに、語末まで高音の続くもう一つの型も優勢である。この両型のどちらをとりがちであるかが、話者の年層と関連するものか、あるいは発言時の心理的な条件によるものか、そのあたりはまだ調査不十分である。ただ、強さが高さに密接に関係しているらしい——強めが高さを引出している——という印象が強い。何気なしの発音と判断されるような時には、一語中の高低の差はほとんど感じられなくなる。今後調査法をもなおよく検討して、実態を正確に把握したい。文のアクセントにおいても、強めが高さに深いかかわりを持つらしいことは、すでにその項でふれてきたとおりである。

3 文アクセントと語アクセント

柳島地方では、自然会話の中の語のアクセントは一定していない。語アクセント調査では、200語の二音節語をすべて「高低」型で答えた老人男子が、文の中では「マタ(又)……。」「ムネバ(胸をば)……。」「クツト(靴と)……。」「アジデ(足で)……。」など、さまざまな型に発音している。同一語が続けて出る場合でも、次のように、異なったアクセント型を取ることが多い。

- ハヤカデス ネー。お早いですねえ。(中女)
- アータ ハヤカ ノーー。あなたお早いですね。(老女)
- ハマキノ マッシロ シトル。葉巻(稲の害虫)が真白になってる。(老男)
- ハマキチャー アオムシノ ヤ。
- コゲン トコロマデ ヒラクチノ デテ クルケン ノーー。こんな所までまむしが出てくるからねえ。(老男)
- ヒラクチノ オル バイ ノーー。まむしがいるんですね。(中男)

文中の語のアクセントは、その語が、どのような文アクセント波の、どの位置を占めるかによって、自然にきまるようである。また、話者の表現心意によって、文中の語のアクセントが支配される場合もある。歓談の座に遅れて出席した老女は、「ヨカ オボンデ ゴザイマス。」と挨拶しながら入室してきた。老女はまず仏参をすませ、ようやく自分の席に落着いて、あらためて「ヨカ オボンデ ゴザイマス。」と丁寧に頭を下げた。

語のアクセントの一定している地域では、原則として、語は文中でもその型を保存している。文アクセント波のうねりが文中の語の高低を支配することは、いわゆる一

型アクセント地域における特異な文アクセント法であろうか。

おわりに

福岡県地域のアクセント生活は、西と東、また南と北とでは、かなり状況が異なっていて複雑である。もっとも特色の耳だたしい筑後地域の実態をまず明らかにして、順次、他地域のアクセント生活にも考察を進めていきたい。

筑後に隣接している筑前南部の文アクセントは、筑後のそれときわめて近い。語アクセント状況もほぼ似ている。

- 。リョジュンセンソー ニャ カカトリマッセンバツテガ ホーテンコーゲキ
ニャ カカトリマシタ。旅順戦争には参加していませんでしたが、奉天攻撃には参加していました。(老男) <甘木市持丸>

筑前東部地域の文アクセントにも、筑後文アクセントと共通するものはいくらか見られる。

- 。ナン ショルト カー。何をしているのか。<宗像郡大島村>
。ナシ ユーテ ヤラッシャレンヤッタ カ。なぜ言って下さらなかったか。<宗像郡大島村>

一方、語アクセントを見ると、筑前東部地域は多型アクセント地域で、筑後とは異なっている。豊前地域にはこのような文アクセントは聞かれず、語アクセントの型も筑前東部よりは多い。福岡県内の語アクセントと文アクセントとの実態を正確に把握することが出来たら、その立場から、文アクセントと語アクセントとの関係についても、何ほどか言及出来そうである。

(1973. 9. 20)

藤原与一先生の御教導に深く感謝申し上げます。筑後調査では、郷田敏男校長先生御一家の、なみなみならぬお世話をいただきました。厚く御礼申し上げます。土地の方々のあたたかい御協力も忘れることが出来ません。

〔参考文献〕

藤原与一『昭和日本語方言の記述—愛媛県喜多郡長浜町柳生の方言—』(昭和日本語の方言第1巻)

愛宕八郎康隆「長崎地方の文アクセントの特質傾向」(長崎大学教育学部人文科学研究報告第18号)